明日への道標

芸術は生活と共に生きる
―岡本太郎 爆発する力―

㈱日本設備工業新聞社
代表取締役社長 高倉克也

2025年国際博覧会の開催地が大阪に決まった。いわゆる大阪万博は1970年以来55年ぶりとなる。当時のテーマ展示プロデューサーに起用されたのが岡本太郎（1911－1996）で全長が70ｍに及ぶ巨大モニュメント・太陽の塔で脚光を浴びた。

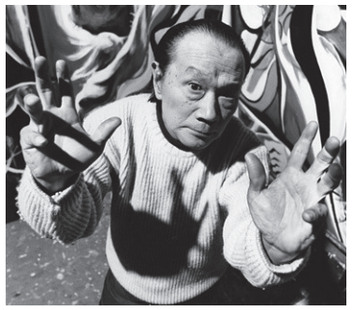
テレビにも頻繁に登場して人気者になった岡本は異色の芸術家として自分の作品をいっさい売ろうとしなかった。その代わり市販の商品は次から次へと手がけた。椅子、コップ、トランプなどに加えてウイスキーのおまけまでつくっている。

支離滅裂とも見える岡本の行動にはひとつの思想にまで高められた明確な理由があった。伝統的な画壇からどれほど孤立しても挫けず、屈せず、躊躇せず独自の個性を解き放った。

パリの10年による衝撃

岡本は現在の神奈川県川崎市で生まれた。父は漫画家の岡本一平で朝日新聞に連載した漫画漫文が評判を呼び、並外れた放蕩ぶりでも有名だった。作家である母の岡本かの子は世間知らずの大地主の娘として家事や育児にまったく関心を示さなかった。岡本も「母親としては最低の人だった」と語っているものの、生涯にわたって慕いつづけた。

幼い頃から絵を描くのが好きだった岡本は学校教育に馴染めず入転校を繰り返した。ようやく個性を認めてくれる教師と出会った慶応義塾幼稚舎から普通部を経て東京美術学校（東京芸術大学）に進学する。だが何のために描くのかという疑問が常に頭から離れなかった。


岡本太郎

朝日新聞の特派員として一平がロンドン海軍軍縮会議の取材に出向くことになり、岡本も休学して一家３人で渡欧する。自由奔放なかの子は愛人の青年をふたり連れていた。神戸から出航した船は1930年１月にフランスに到着し、岡本は約10年間にわたってパリで生活することになる。

当初は日本の旧制中学に相当するリセの寄宿舎に入り、フランス語に慣れてくるとパリ大学ソルボンヌ校で哲学、美学、文化人類学などを学んだ。ただ描くのではなく、なぜ描くのかという理由を模索していた。思想家のジョルジュ・バタイユに傾倒し、人間の自由を抑圧するファシズムを批判する演説を聴いて人生が変わったと述懐している。

1932年、岡本を残して両親が先に帰国した。母のかの子は７年後に亡くなり、港で見送ったのが今生の別れとなった。

芸術上の転機はたまたま立ち寄った画廊で訪れた。パブロ・ピカソの抽象画「水差しと果物鉢」を見て衝撃を受ける。のちに上梓した著書『青春ピカソ』で「この様式こそ伝統や民族、国境の障壁を突破できる真に世界的な二十世紀の芸術様式だった」と興奮気味に書き記している。

時代を創造するものは誰か

1940年、ナチス・ドイツによるパリ陥落の直前に帰国する。渡欧中に描きためた作品を二科展に出して入選し、日本で初の個展を開いた。２年後、海外在住で延期されていた徴兵検査で召集され、陸軍二等兵として中国戦線へ出征した。身長156㎝と小柄で31歳の岡本は過酷な軍隊生活を送り、上官の命令で師団長の肖像画を描かされたりした。

終戦後、捕虜となっていた長安から帰国すると東京の自宅と作品は焼失していた。心機一転し、新たにアトリエを構えて創作に励む。1947年、新聞紙上で「絵画の石器時代は終わった。新しい芸術は岡本太郎から始まる」という挑発的な宣言を発表し、既成の画壇に叛旗を翻した。文芸評論家の花田清輝らと夜の会を結成し、前衛芸術の可能性について語りあう。のちに養女となる平野敏子とも出会い、彼女は生涯独身だった岡本の秘書役として支えつづけた。

1951年、東京国立博物館に陳列されていた考古物の中から縄文土器を発見し、思わず叫びたくなるほどの感動を覚える。美術雑誌に「四次元との対話―縄文土器論」を寄稿して反響を呼び、日本美術史は岡本によって縄文時代から記されるようになった。同時期に琉球諸島や東北地方の習俗にも関心を深める。

著作活動に精を出して1954年、岡本の芸術観を体系的に論じた『今日の芸術　時代を創造するものは誰か』を出版してベストセラーになる。同書で「今日の芸術は、うまくあってはならない。きれいであってはならない。心地よくあってはならない」と既存の常識的価値観を打破する論陣を張り、世論を喚起した。岡本は見る者を圧倒し、世界観を根底から覆し、生活を変えてしまうほどの力をもつ作品こそ真の芸術と主張した。

1960年代後半からメキシコを訪れ、先住民族や下層階級に文字が読めなくても革命のメッセージを伝えることができる壁画運動に共鳴する。壁画は公共の場に描かれ、岡本が反戦反核への祈りを込めた巨大壁画『明日の神話』も東京・渋谷マークシティの連絡通路に設置されている。

ストレートに社会へ

1967年、大阪万博のテーマ展示プロデューサーを委嘱される。就任当初からメインテーマである「進歩と調和」に反発していた。科学万能主義、近代合理主義、経済至上主義を批判していた岡本は「人類は進歩してない。何が進歩だ。縄文土器の凄さを見ろ」と公言していた。べらぼうなものをつくってやると太陽の塔の構想を練り上げる。

基底部の直径約20ｍの太陽の塔は未来を象徴する上部の黄金の顔、現在を象徴する正面胴体部の太陽の顔、過去を象徴する背面の黒い太陽で構成されている。黄金の顔についた眼は日没と共に光り、塔の内部では生命の樹と名づけられた生命力のシンボルが見る者を圧倒した。

大阪万博で名声を高めた岡本は日本テレビのバラエティ番組にレギュラー出演して評判を呼ぶ。ドライアイスの煙の中から「芸術は爆発だ！」と叫びながら登場し、エキセントリックなおじさんとして人気者になった。仕事ではキリン・シーグラムのブランデーのおまけとして＜顔のグラス＞を制作し、キャッチコピーの「グラスの底に顔があってもいいじゃないか」が流行した。

芸術家は通常、画商を通して美術のマーケットに作品を送り出す。一点もののオリジナルは高値がつき、権威が備わり、尊敬もされる。ところが岡本だけは違った。いくら金を積まれても作品を売ろうとせず「芸術は民衆のものだ」とストレートに社会に届けようとした。彼の作品展はデパートの催事場で行われるのが通例で芸術が市井の人々から乖離することを何よりも怖れていた。

数千円程度で買える日用品を数多くつくったのも芸術は生活と共に生きると確信していたからだ。岡本にとって芸術とは生きることそのものを意味していた

80歳を迎えて所蔵する作品のほとんどを川崎市に寄贈する。４年後、急性呼吸不全でこの世を去った。生前から「死は祭りだ」と葬式を嫌っていた岡本に配慮して葬儀は行われず、お別れの会として「岡本太郎と語る広場」が開かれた。

晩年まで「爆発はいまもつづいている」と創作の炎は消えなかった。